文化的景観という取組の有効性と課題

Efficacy and Problems of Cultural Landscapes

恵谷 浩子*

Hiroko EDANI

はじめに

文化的景観は平成16年の文化財保護法改正を受けて新たに加わった文化財類型である。筆者はその研究をおこなうため、平成19年に現職に就いた。そこで初めて出会った文化的景観という概念・取り組みは、学術的下支えが乏しく、さまざまな情報が錯そうして混乱した状況にあったといえる。その要因は、第一に、「景観」という言葉そのもののとらえ方に違いが生まれていたこと、第二に、価値評価とそれに連動する保全の手法を持ち得ていなかったこと、が挙げられる。

1 「景観」のとらえ方と学術の方向

文化的景観に取り組むなかで、最初の混乱は、多くの行政担当者や住民にとって「景観」＝「見た目」としてとらえられていたことに依拠する。一方、学術側では地理学・生態学等と、造園学・建築学・工学等とで景観概念に違いがあり、文化的景観は前者の概念を採用していた。

つまり、前者の学術分野は、景観に価値意識を加えることなく、客観的分析により地域の実在を明らかにしようとする研究分野であり、「景観」を、人と自然の相互作用、あるいはシステムの結果としての領域のまとまりとしてとらえている。重要なことはシステムであり、人々が目にする眺めは単にその視覚的特性に過ぎず、それ自体の美しさは重視されない。一方、後者は土地や有形物に関する計画や設計をおこなうことを目的としているため、視覚的な対象を構造的にとらえ、善し悪しや美醜の判断を伴う必要がある。そのため、視覚的对象を意味する「景観」という言葉が多用されてきた。

制度運用当初、景観には上記のような2つの概念があること、そして文化的景観では前者の景観概念を採用すること、こうした基本的なことさえ整理されていなかった。皆が手探りの状況の中で、まず求められたことは、景観概念の違いを認識した上で、文化的景観とは何かを全国に示し、共通認識を図ることだった。ただし、筆者自身も浅学で、後者の景観概念しか把握していない中で文化的景観の調査研究に取り組み始めたため、この課題

を前に大いに戸惑ったことは否めない。

2 価値評価・保全手法と学術

景観概念問題と同時に立ち現われたものが、文化的景観の価値分析の手法【価値評価論】と、その価値を持続させていくための手法【計画論】の混乱である。例えば、文化的景観では、〇〇地区の棚田と〇〇地区の棚田では何が違うのか、各地区の価値は何なのか、といったことが問われるが、それへの応じ方がわからない。文化的景観の保護制度が誕生して10年がたち実例を積み重ねる中で解消されつつあるが、現在も学術面での課題はいくつかある。

第一に、各文化的景観の価値を明瞭にするための比較研究の必要性が挙げられる。もちろん文化的景観は優品主義ではないが、相対化されることで初めて見えてくる独自の価値があるし、それを軸に保全を図ることで、各地域の個性を際立たせていくことができる。

第二に、各文化的景観の本質的価値、つまり全体のストーリーを紡ぐ作業の担い手が不足している点がある。文化的景観は様々な専門家が関わる魅力的な仕組みである半面、それぞれの専門の立場から出された価値を統合することが難しい。現状では、各文化的景観の本質的価値が、それぞれの学術分野から出された価値の集合にとどまっている。

第三に、文化的景観の価値から保護手法へと結び付ける理論が未熟な点が挙げられる。地理学・歴史学・民俗学などの分野では価値分析的視点が優先し、その一方で、造園学・建築学・工学分野では計画的視点が優先してきたため、価値と保全との関係がなかなか構造化されない。今後、文化的景観という新しい仕組みに対応できるよう、分野を超えた学術面からの取り組みを重ねる必要があるだろう。

3 保全対象としての水田

文化的景観の中でも特に農村計画学に関連する課題として挙げられるのが、水田の保全手法の開発である。

(1) 文化的景観の構成要素としての水田

*独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 National Institutes for Cultural Heritage Nara

Key Words : 1) 文化的景観, 2) 価値評価, 3) 保全

重要文化的景観に選定された地域の水田にはどのようなものがあるだろうか。調査研究等から概観すると、現段階では3つの類型のものがあると考えられる。それは、A：近代的圃場整備開始以前の水田を含む事例、B：明治以降に実施された田区改正による10a規模の水田を含む事例、C：戦後の圃場整備事業による30a規模の水田を含む事例、である。

Aは「一関本寺の農村景観」（岩手県一関市）や「姨捨の棚田」（長野県千曲市）、「田染荘小崎の農村景観」（大分県豊後高田市）などの水田である。重要文化的景観での位置づけとしては、中・近世からの形を残す水田そのものに価値を求めるタイプといえる。

Bは「佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観」（新潟県佐渡市）や「通潤用水と白糸台地の棚田景観」（熊本県山都町）などの水田である。農地の開墾史とその営みの持続性に価値を求めるタイプといえる。

Cは「四万十川流域の文化的景観 中流域の農山村と流通・往来」（高知県四万十町）や「天草市崎津・今富の文化的景観」（熊本県天草市）などに含まれる水田である。これらは稲作のみを価値の主軸にするのではなく、諸要素が複合することに価値を求めるタイプといえる。

(2) 文化的景観における農地整備の輪郭

こうした中で、保全型の農地整備が実施された事例として「一関本寺の農村景観」や「通潤用水と白糸台地の棚田景観」がよく取り上げられる。

一関本寺では中世からの歴史的な区画割や水路網が良好に保全されていることに価値が置かれたため、整備の際は農道や水路の改良、区画の最低限の拡大に留め、できるだけその形態を残すことが最優先された。一方、通潤用水では棚田へ水を配る土水路内の生態系の保全に価値を置いたため、形態は変えながら管理用通路の設置や堤防の補強をおこなった。

図1 佐渡西三川の砂金採掘跡地を利用した水田

重要文化的景観の整備の実践例からは、文化的景観においては各地域の本質的価値如何で異なる整備手法を用い、その価値を持続させる、という輪郭が見えてくる。これに対し現状の課題は、研究をともなった実践の絶対的な不足と、自治体が頼ることのできる研究者の圧倒的な不在が指摘できる。

4 農村計画学への期待

文化的景観は地域らしさを評価し、その生きた姿を持続させるための仕組みである。よって、前述のような農地の区画整備すべてをマイナスにとらえるものではなく、生産技術や社会条件などのシステムの進化により圃場形態も進化するという前提に立つ。ただし、その進化は地域らしさを壊さない範囲のもので、他方では生活・生業の場としても生きていける範囲のものでなければならぬ。国の重要文化的景観選定地はもちろんのこと、積極的に地域に文化的景観の考え方を導入することで、通り一遍の整備ではなく、地域らしさを高めるような事業がおこなわれる可能性がみえてくるのではないだろうか。

さまざまな指摘をおこなったが、こうした取り組みの中で最も不可欠で困難なことは、地域の主体性をどう引き出すかである。地域住民に地域らしさを高めるような暮らしをおこなってもらうには価値共有が必要であり、そのモチベーションを上げる仕組みが必要である。その点こそが実学である農村計画学に期待されるところに他ならない。

文化的景観は多様な専門を引き寄せ、他分野の領域まで踏み込める魅力的な装置である。ただし、それは各自の高い専門性があった上での話であり、学生時代には自分の専門とする領域の知識と経験をバランスよく身に着け、将来的にそれを磨いていってほしい。

図2 土水路の整備事業実施中の白糸台地

Key Words: 1) Cultural Landscapes, 2) Valuation, 3) Conservation